

カンポ＝フォルミオの和約（1797年）以後における トルコの対ロシア政策の変化

尾 高 晋 己

はじめに

小論ではカンポ＝フォルミオの和約締結（1797年10月17日）から対仏露土同盟条約（1799年1月3日）にいたる露土関係を扱う。トルコの伝統的な外交政策は親仏・反露であったが、この期間に親露・反仏へ変化が見られた。オスマン帝国はイスラム国家であり、異教徒（キリスト教徒）の国と同盟を締結することはイスラム法上原則的には許されないが、すでにスウェーデン（1789年）およびプロイセン（1790年）と同盟条約が締結されたことはあった。しかし両同盟条約ともフランス革命という大事件のために本来の目的を達成できず失敗に終わった。今回の対仏露土同盟条約の結果、露土両国はかつてない規模で実際に軍事協力を遂行し、1799年春にヨーロッパで成立した第二次対仏大同盟のさきがけになったといえる。つまりこの同盟条約は、前二者の同盟条約と比較してトルコ史というまでもなく、ヨーロッパ国際関係史の見地からもきわめて重要な条約である。そこでこの同盟条約締結にむけてトルコ政府が伝統的な外交政策をなぜこの時期に逆転したのか、その要因と過程を明らかにしたい。トルコ外交史のなかでも露土関係史の研究はおくれており、クラトの通史[Kurat 1970]があるぐらいである。

1 フランス革命の展開

ヤッシー条約調印（1792年）の前年8月にプロイセンとオーストリアはピルニッツ宣言を出して、フランス革命への干渉を示唆した。1792年11月ジェマップの戦いでフランス軍はオーストリア軍を破り、オーストリア領ネーデルラントの大半を制することが可能となった [McKay & Scott 1991: 281]。翌年1月にルイ16世は、ついに処刑され、2月にイギリスは、プロイセン・オーストリア・オランダ・スペイン・サルディニアと第一次対仏大同盟を結成した。他方フランスは翌月までにイギリス・オランダ・スペインに宣戦布告した。英国の首相小ピットは、フランスのジェマップにおける勝利とこれに続くネーデルラントのたやすい征服に驚いた。その結果フランス革命は、フランスの国内的事件からヨーロッパ全面戦争へと展開した。

ロシアのエカテリーナ2世はフランス革命の勃発に驚き、ルイ16世が処刑された後、フ

ランスとの外交関係を断った [McKay & Scott 1991: 284]。だがこの懸念のためにポーランド問題に注意を傾けることを忘れはしなかった。

フランスは、1793年の国内的危機（ヴァンデの内乱、フェデラリストの反乱、深刻な経済的不振）を乗り切り、めざましい勝利を得て攻撃に転じた。1794年の一連の勝利は、ベルギーにおけるフランスの支配を確立した。1794～95年の冬に、オランダはいとも簡単に占領された [McKay & Scott 1991: 285]。

プロイセンは、フランスと1794年11月に休戦条約を、翌1795年4月にバーゼル講和条約を結び、対仏大同盟から離脱した [McKay & Scott 1991: 285]。同年5月16日にオランダが、7月22日にスペインも講和を結び、それぞれ同盟から離脱した [Soysal 1964: 137]。1795年のなかごろまでにフランスとまだ戦闘している主な国は、オーストリア・イギリス・サルディニアであった [McKay & Scott 1991: 286]。

1795年10月以後、フランスを支配した総裁政府は、南ドイツ・イタリアへ攻撃することでオーストリアを脅かした。1796年3月ナポレオンはイタリア遠征に出発し、破竹の勢いで勝利を得た。彼はサルディニアに講和を結ばせ、イタリアにおけるオーストリアの支配を倒す企てをした。つまり1797年4月にはレオーベンの仮条約を、同年10月17日にカンボ＝フォルミオの和約を締結した。

2 フランス革命へのトルコの対応¹⁾

フランス革命がもたらしたヨーロッパの混乱は、トルコ人にとって対岸の火事であり、キリスト教国がともに争っていることは、トルコにとり有益なことと考えられた。

「トルコ人は、フランス革命をイスラム国家としてその伝染をのがれているオスマン帝国にとっては、かかわりのないキリスト教世界内部の問題としてとらえた²⁾。フランス革命に西欧諸国が夢中になっていることは、トルコにとって外交上有利な状況であった」 [Lewis 1953: 119]。

セリム3世の秘書アフメト＝エフエンディ Ahmed Efendi は「ロシアは、西欧諸国がフランス革命に夢中になっているこの時期を、ポーランド問題を自由に処理できる（第三次ポーランド分割）機会とみなしている。——フランス革命が、オスマン帝国の敵国に梅毒 (maraz-i firenk) のようにひろがり、西欧諸国を互いに戦わせることによりオスマン帝国にとって有益な結果が得られますように」 [Öz 1942: 184] と記述している。

またトルコ国内にあって、フランス人による「三色旗」をはじめとするフランス革命のシンボルの使用禁止を求めるオーストリア・プロイセン・ロシアの要求に対して、トルコ政府

1) オスマン人のフランス革命観の変化については、田中・木村・鈴木 1992: 80-99 を参照。

2) オーストリアの敗北はかつてロシアと同盟してトルコと戦ったことを記憶しているトルコ人を喜ばせた [Cevdet 1309: VI, 190]。

は曖昧な（歯切れの悪い）回答をした [Zinkeisen 1859: VI, 859 ff]。ある日オーストリアの首席通訳が、書記官長のもとにやってきて不満を述べた際に、書記官長は「われわれは繰り返してあなた方にのべてきた。オスマン国家はイスラム国家である。我々はこれらの記事を問題としない。友好国の商人を客人としてみなしている。彼らは好きなものを身につけ、頭に葡萄の入ったかごをのせていても、なぜそんなことをするのかと尋ねることはしない。それはオスマン国家の義務ではない」 [Cevdet 1309: VI, 183] と回答した。

しかしトルコ政府は、プロイセンが1795年4月5日バーゼル条約でフランスと講和を結ぶまでは、フランス革命に好意的中立的な態度を堅持しつつも、フランス革命政府を正式に承認することはしなかった。1795年5月4日にプロイセン使節は、オスマン政府にバーゼル条約締結を知らせた [Soysal 1964: 136]。同年6月11日にフランス使節ヴェルニャック Verniac は、大宰相だけに謁見を許され、ここにフランス革命政府は正式に承認されたことになる [Cevdet 1309: VI, 194]。慣例にしたがって贈り物がなかなか届かなかったが、ヒジュラ暦1210年シェッヴァル月18日（西暦1796年4月26日）にセリム3世に謁見を許された³⁾。フランス使節ヴェルニャックは、後任のドゥ＝バエット du Bayet が到着する1796年10月まで任務を果たしその1ヵ月後帰朝した。

正式に公使としてイスタンブルに到来したときから、ヴェルニャックは前任者の方針に従いトルコに防御同盟条約を提案していた。セリム3世は、「旧敵オーストリア・ロシアから安全が確保されないので、ヨーロッパの勢力均衡 *muvazene-i Avurupa* に組み込まれるためにヨーロッパの国々と同盟を結ぶことを望んでいた。しかしこの同盟は、トルコをただちに戦争に引き込むことになり妥当ではないと判断して、書記官長と交渉させた」 [Cevdet 1309: VI, 200]。交渉の結果、現在ヨーロッパでおきている戦争にトルコは中立を守ること、フランスが対仏同盟諸国と講和を締結したのち、有効となる防御同盟条約をフランス使節に提案した [Cevdet 1309: VI, 200]。

長い討議の後、同盟計画が明らかとなった。つまり「両国はおたがいの領土を防衛する目的のために互いの領土の保証人となり、一方がある国から攻撃を受けた場合に、他方はあらゆる手段で支援する。この防御同盟条約の適用範囲はヨーロッパに限定され、ヨーロッパの秩序維持を目指す本条約を尊重する国の参加も許される」 [Cevdet 1309: VI, 200-201]。この問題をセリム3世は大宰相府において、書記官長を含む高官から成る非公開の会議で、ヒジュラ暦1210年ズィルカッデ月12日（西暦1796年5月19日）に審議させた [Cevdet

3) Cevdet 1309; VI, 200. プロイセンがフランスと講和を結んだという情報が、イスタンブルに伝わった。そこである国がフランス共和国を認めた *tasdik olunmuş* ので、いまやオスマン政府がフランス革命政府を認めること *tasdik* になんら障害はないと考えられる *beis görülmeyüb*。フランス公使と、さらにフランス共和国をもトルコは承認した *tasdik buyurulmuşdur* [Cevdet 1309: VI, 193-194]。

1309: VI, 201]。

3 カンポ＝フォルミオの和約（1797年10月17日）とトルコ

ナポレオンはイタリア遠征に出発する以前には、トルコに軍事顧問として赴くことを革命政府に提言したこともあった。だが、イタリアでの大勝利の結果これまでの対トルコ政策、つまり対地中海政策を見直す必要性を感じた。つまりイタリア本土よりイオニア海およびエジプトが、フランスにとってきわめて重要であることを認識した。彼はその重要性を1797年8月16日付けの書簡で総裁政府に知らせた。

「コルフ島、ケファロニア Ceohalonia、ザンテ Zante の島々は、われわれにとってイタリア全土よりも一段と重要であります。これらの島々あるいはイタリア全土のいずれかを選択しなければならぬとすれば、われわれの通商と豊かさのためにイタリア本土をオーストリアに譲り、われわれがこれらの島を維持することが適切であると考えます。オスマン帝国は日ごとに崩壊に向かっています。われわれがこれらの島を領有することは、オスマン国家を可能な限り強化するか、もしそれが不可能な場合つまりオスマン帝国が崩壊した場合、その分け前にあずかることができます。イギリスを完全に打破するために、エジプトの占領が必要と感じるときが近い将来やってくるでしょう。日を追って弱体化している広大なオスマン帝国に対して、われわれの中東の通商を維持するために対応策を講じなければなりません」[Testa 1864: I, 515-516]。

1797年10月にオーストリアは、単独でフランスとカンポ＝フォルミオの和約⁴⁾を結んだ。その結果オーストリアは同盟国を見捨て、東方での領土上の償いとひきかえに、西欧におけるフランスのさまざまな征服地を承認することに同意した。和約の諸条件によってヴェネツィア共和国はついに崩壊し、その領土は両国の野心を満たすために分割された。オーストリアはイストリア半島・ダルマティア・カッタロ Cattaro 湾・アドリア海の旧ヴェネツィア領に対する支配権を得たが、他方フランスはイオニア諸島（コルフ島、Paxos、サンタ＝マウラ島 Santa Maura, Ithaca、ケファロニア島、ザンテ島、Cerigo）と南アルバニア・北エピルス沿岸に位置する港湾都市（パルガ Parga、プレヴェザ Preveza, Butrinto, Vonitza）を手に入れた。フランスはこうしてオスマン帝国と直接境界を接する隣国としてロシア・オーストリアの仲間入りとなった。この和約は、トルコが久しく要請していた軍事的保障を提供する機会を与えたが、同時にバルカン半島のトルコ領に非常に近接したところに、フランスの軍事基地の設置を認めることでトルコに新たな脅威を生み出した。

1768～74年の露土戦争の際にロシアの支援を得て、トルコに反乱をおこしたモレア半島の山岳地帯に住むマンヨ Manyo たちは、このたびフランスに援助を求めた。つまり1797

4) フランス語の和約文については、『近代国際関係条約資料』231～240頁を参照。

年7月にマンヨの指導者は、ボナパルトのもとへ息子 Gligaraki を秘密裏に送りモレア半島へ艦隊を派遣してくれることを要請した [Soysal 1964: 169]。当時ミラノにいたボナパルトは、「古代ギリシアの自由を今日まで堅持しているこのギリシア人に対して、いつでも保護する行動をとる用意がある」という返信を、祖父がギリシア人である Stefanopoli を介して知らせた [Testa 1864: I, 514]。だが、まだこの時点でボナパルトは、トルコとの武力衝突を考えてはいなかったようである。Gligaraki からの援助要請の手紙を受け取ったボナパルトは、1798年1月6日に総裁政府に、マンヨと接触する必要性を伝えた [Testa 1864: I, 515]。

他方、モレア半島において事実上独立政権を樹立していたヤンヤ総督テペデンリ＝アリ＝パシャは、イスタンブル駐在フランス使節デコルシェ Descorches と接触をしていた。ついに1797年6月にイタリア戦争の勝利を祝し、友好関係を維持したい旨をボナパルトに伝えた [Soysal 1964: 170]。デコルシェは、テペデンリ＝アリ＝パシャにイオニア諸島の支配を担っている Gentili にたよること、見返りにフランス軍に食料の供給をする旨の手紙を書いている。このころフランス大使の外交的手腕がものをいって、トルコ政府も可能な限りフランス軍に食料を供給するようにテペデンリ＝アリ＝パシャに命じている [Soysal 1964: 170]。まだトルコは、ボナパルトの真の目的が何であるか認識できていなかったようである。ボナパルトは Gentili の慎重な行動は認めながらも、テペデンリ＝アリ＝パシャをフランスに服従させておき、彼に援助をすることをおしかなかった。事実アリ＝パシャに2隻のフリゲート艦を安価で売却している [Soysal 1964: 171]。だが、テペデンリ＝アリ＝パシャはフランスと友好関係を保っていたが、ボナパルトがエジプト遠征に向かった機会をとらえて、ダルマチア沿岸からフランス人を追放した。

しかしオスマン政府は、1797年末にフランスがギリシア人の独立を扇動しはじめていることに関するモレア総督ハサン＝パシャ Hasan Paşa の報告書を受け取った。

「フランスがヴェネツィアを征服した後、オーストリア領と隣接するヴェネツィアの領土はオーストリアへ併合することで（オーストリア）皇帝と協定を結びました。この協定（カンポ＝フォルミオの和約——筆者）にしたがって、オーストリアはフランスが必要なときに要求される軍力で、支援することを受け入れました。協定の諸原理のうちの一つは、オスマンがかつてヴェネツィアから占領したモレア半島とクレタ島を、フランスが要求できるかということであり、現在フランスは、わがオスマン国家のきわめて誠実な友人であります。しかしコルフ港に多くのフランスの船舶が停泊している以外に、今月15日に13隻の船舶で前述の港に2回、1万2千名の兵士を送ったことが知らされました。この兵士はザンテ、ケファロニアなどの島々に分散していること、現在島々に駐屯している兵士以外に、コルフ島に駐屯している4万の兵士の数はしだいに増加していること、弾薬も絶え間なく搬送されていることを警告いたします」 [Karal 1937: 113; Karal 1938: 57]。

その後ボナパルトが、ギリシア人やアルバニア人を蜂起させようとしている情報は、オス

マン政府を一層不安にさせた。ちょうど大使が逝去したころであったために代理大使ルフィン Ruffin は、トルコ政府の問い合わせに答えて本国政府に 1798 年 1 月に事態確認の書簡を出した。フランス外相タレーランは、3 月 15 日付けの回答を送った。そのなかで彼は「総裁政府は、トルコの権利を侵害するつもりはないこと、それとは反対に両国間の昔からの友好関係を引き続き維持していく所存であること、トルコの権利に鋭敏に敬意をはらうこと、反トルコ運動を企てないこと、および住民を反乱へと扇動しないことに関して、当該の司令官に総裁政府は訓令を出したので書記官長を安堵させるように」[Soysal 1964: 173] と知らせていた。

オスマン政府は、カンボ＝フォルミオの和約により、ヴェネツィアが解体されることを認めたくはなかった。この和約が結ばれたことで、2 年間続いてきたトルコ＝フランス同盟の締結は水泡に帰した [Soysal 1964: 174]。またジェウデットは、カンボ＝フォルミオの和約締結により、ヨーロッパの秩序の崩壊とフランス革命の波及の影響に懸念を抱いていたようである。

「カンボ＝フォルミオの和約によりヴェネツィアは、解体をよぎなくされた。フランス共和国の影響力はヨーロッパに水のようにすみずみまで広まり、革命は至る所へ洪水のごとく襲いかかり始めた」[Cevdet 1309: VI, 280]。

4 ロシア使節コチュベイと書記官長メフメト＝ラシト＝エフェンディ Mehmet Rasid Efendi との会談（ヒジュラ暦 1212 年ジェマズィエルアヒル月 15 日、西暦 1797 年 12 月 5 日）⁵⁾

ヤッシー条約締結（1792 年）以後、露土関係は友好的であった。とりわけエカテリーナ 2 世が逝去（1796 年 11 月 17 日）し、息子のパーヴェル 1 世が即位してからロシアの対トルコ政策は大きく変化した。

カンボ＝フォルミオの和約締結から約 1 ヶ月半後、ロシアからの要請でボスフォラス海峡に面した某所で夜、両者は極秘に会談をおこなった。ロシア皇帝パーヴェル 1 世から使節に送られたロシア語で書かれた書簡は、通訳を介して書記官長に伝えられたことがトルコ語史料からわかる。会談の記録とはいえ、ロシア側から、一方的にイタリアにおける変化した情勢に関する情報を提供すること、国際情勢の変化の結果、トルコが影響を受けた場合のとるべき措置に重心が置かれている。

これまで両国は外交上対立関係にあったことを斟酌し、ロシア側は前皇帝エカテリーナ 2 世の敵対的姿勢から、パーヴェル 1 世の和解的な態度に変化したことを、トルコ側へ伝えることに神経を使っているのが読み取れる。彼は過去の傲慢で攻撃的な態度を改めて、両国の

5) Karal 1937: 117-120; 尾高晋己 2003 を参照。

利害にもとづきトルコとの和解を推し進めた。ロシアのトルコに対する姿勢は、「オスマン国家とフランスとの間を疎遠 (tebrid) にさせるものではなく、オスマン国家に対する誠意 (safvet ve hulul) とヨーロッパの勢力均衡 (Avrupa muvazenesi) を維持したい願望にもとづいている。」

イタリアから入手した情報によれば、「ヴェネツィア領をオーストリアと分割したボナパルトは、モレア半島・イオニア諸島・アルバニア沿岸の住民を独立へと扇動し、ギリシア人の国家を樹立することを考えている。」

「エカテリーナ2世はオスマン国家の敵であったが、前任者と異なりパーヴェル1世はオスマン国家の至福を願う皇帝であり、したがって彼の要求は友のそれとしてうけいれられねばならない。」

「ロシア使節は、ボナパルトによるギリシア人の独立国家建設計画は実現困難と認めている。だが慎重にオスマン国家が、次の措置を講じることが有用であると考えている。」

「つまりオスマン国家のレアーヤー（非ムスリム）は、不当な支配下にあるが、正当な支配が行われればオスマン国家への絆も増すであろう。したがってオスマン国家は、この点を考慮に入れて適切な支配をなせねばならない。」

「イタリア方面にスパイを送ることによって、フランス人の動向を規則的に知らねばならない。」

「パリ駐在の聡明で有能なトルコ使節エセイット＝アリ＝エフェンディ Esseyid Ali Efendi を介して、タレーランに金品を贈り、フランスの隠れた政治情勢の情報収集に努めねばならない。」

ロシアは和約の結果により生じた東地中海へのフランスの進出に対する懸念、つまりフランスの側圧を鋭敏に感じ取っていた。だが、この時点では、ロシアとはちがいトルコはまだフランスに対する警戒心を強く意識していなかったようである。

翌年ヒジュラ暦 1212 年ラマザン月下旬（西暦 1798 年 3 月 8 日～3 月 18 日）にペテルブルクからの急使がイスタンブルにきてロシア使節に訓令を手渡した。それにもとづきロシア使節は、「ヨーロッパの混沌とした状態およびフランスのよく知られている状態に鑑み、ロシアはこの時期に自身の国の安全のために国境に兵力を移動し、戦争準備に専心することで自衛準備を企てる。毎年訓練のために戦艦を黒海に派遣することによって自衛を成し遂げる。オスマン国家が友好と相互の防衛を尊重する限り、安全を確保し、損害から自国とオスマン国家を守ることにするために、ロシア皇帝は軍隊招集に全力を上げる」と述べた [Cevdet 1309: VI, 282]。

このころフランスはロシアに対抗するように、トルコに 4 万～5 万の兵力の援助を行うという噂が流れた。だが書記官長はこの噂を否定し、「オスマン国家はロシア皇帝の行動に満足しているので、フランスからどのような提案があっても、オスマン政府の問題に適していないので同意できない」と回答した [Cevdet 1309: VI, 283]。

カンボ＝フォルミオの和約調印から数ヶ月が経過したこの時点において、少なくとも書記官長はロシアに対する従来の態度をかえつつあったように推察される。

このロシア側の対トルコ政策の変化は、ロシア使節コチベイが帰国するときにおこなった書記官長との会談からも確認される。

つまり翌年ロシア使節コチベイは、ヒジュラ暦 1212 年シェウワル月（西暦 1798 年 3 月 19～4 月 16 日）に外相に就任するために、帰朝することになり書記官長に別れの挨拶に訪れた際に「ヨーロッパにおける混沌とした状態、諸国家間にみられた勢力均衡の崩壊を考慮に入れて、オスマン国家とロシアとの間で従来見られた敵対関係は、今後は相互によく理解できる友好関係にならねばならない」と述べた [Cevdet 1309: VI, 283]。

クラトによれば同年 5 月～6 月にかけてロシア使節と、トルコの書記官長との外交交渉は続いた [Kurat 1970: 43]。

ボナパルトがトゥーロン港を出帆し、マルタ島を占領していたころ、イスタンブルではロシアの首席通訳フォントン Fonton が書記官長を訪ね、会談を行っていた。つまりヒジュラ暦 1212 年ズイルヒッジ月（西暦 1798 年 5 月 17 日～6 月 14 日）のことであった。

彼は、「ロシアは、毎年慣例により軍事演習を開始する目的で非常に多くの艦隊を派遣しようとしている。この艦隊はクリミアとオデッサ（Hocabey）の間を往来している。フランスが地中海へ艦隊を派遣することは、ロシア皇帝の知るところであるので、黒海沿岸を防衛する目的に必要なときにオスマン艦隊に加わるために、この艦隊をオスマン国家へ差し向ける。オスマン領にフランスがなんらかの攻撃を加えることがおきた場合、ロシア皇帝はオスマン国家と同じ目的を遂行するために使節を任命したことを」伝えた [Cevdet 1309: VI, 284]。

書記官長が「どれほどの艦隊が送られるのか」と尋ねた際に、「12 隻の大型船舶と 100 隻の小艦隊である」と答えた [Cevdet 1309: VI, 284]。

この時期においてロシアは、トルコ艦隊と軍事協力する用意があること、またトルコの書記官長も具体的にロシアの支援の規模を確認していることが分かる。

スルタンへの上奏文のなかで大宰相は「ロシアは一時期以来オスマン国家に好意をよせていることを伝え、フランスが攻撃した場合自身の国に革命が広がることからまもることに注意を払うことは明白である。」と述べた。しかしセリム 3 世は全面的にはロシアに信頼を置いていないので、前述の上奏文に「わが大臣よ、海峡の要塞の防備を完了したか。大砲や弾薬の準備はできたか。他の必要なことを滞りなく完了せよ。」と付け加えた [Cevdet 1309: VI, 284]。

だが大宰相はつぎの上奏文で「ロシアとの同盟を考えるべきときが来た」ことを進言した。このような状況のなかで書記官長アトフ＝エフェンディは、ヨーロッパの勢力均衡と対フランス政策について覚書を作成するように指示された。

5 書記官長アトフ＝エフェンディの覚書

「数年来フランスで革命の火が燃え広がっている。革命家は特権や信仰を排除し、平等とか共和制を宣言している。他の国々に干渉しないと言いながら、不当な統治者に行動をおこなっている。ヨーロッパは混沌としている。一部の国は中立を、他方他の国はフランスと戦争している。しかし参戦した国々はフランスと講和を締結させられている。イギリスとオーストリアだけが残っていたが、後者も講和を結んだ」[Cevdet 1309: VI, 396]。

「フランスは他国に対する領土的野心はないと主張しているが、これは偽りである。サルディニア王国の一部やオランダを併合している」[Cevdet 1309: VI, 396]。

「ライン川左岸もフランスは占領した」[Cevdet 1309: VI, 397]。

「オスマン国家はフランス革命の勃発以来、中立を堅持してきた。事実フランスには穀物など必要物資が提供された。だが、フランスはヴェネツィアの解体に引き続きイオニア諸島と隣接するアルバニア沿岸を併合し、住民に反トルコの宣伝活動を始めた」[Cevdet 1309: VI, 397]。

「どの国の外交政策にも二つの行動原理がある。第一の原理は、変化しない諸条件にもとづいて行動することである。トルコの場合、ロシアとオーストリアは変わらぬ敵国である。これら両国が強化されることは望むべきことではない。これらの敵国と同盟を結ばねばならない。第二の原理は、変化する諸条件によって行動を調整することである。フランスに対してはこの第二の原理もとづいて行動し、正常な条件に復帰した際には第一の原理によって外交政策を遂行する」[Cevdet 1309: VI, 400-401]。

そこでトルコは、フランスの同盟国であり、ロシア・オーストリアの敵国という考えを、正常な状態に復帰するまで棚上げしなければならない。こうしてセリム3世を納得する努力が払われた。

この覚書は閣議で討議され、その結果「一方で戦争の準備を行い、他方でわが国の国益と一致する国々と秘密裏に対仏同盟条約を締結しなければならない」という結論に達した。

この時期イスタンブルでは、対フランス同盟に向けてイギリス・プロイセン・オーストリアの使節が活発な外交活動を展開していた。書記官長は、トルコは偽善 *ikiyüzlülük* を好まないが、事態の必要性により外交の言葉 *lisan-i diplomat* を使用するよう委任された[Cevdet 1309: VI, 285-286]。

6 ボナパルトのエジプト遠征（1798年5月）

ボナパルトはイタリアから凱旋した1797年12月5日に、タレーランとエジプト遠征について長々と意見交換をし、数ヶ月後トゥーロン港において遠征軍派遣の準備を実施することを胸に抱いていたようである[Soysal 1964: 174]。5月19日に同港を出帆し、エジプトへの途中、マルタ島を占領し（6月12～13日）、ロードス島から移住していたヨハネ騎士団を追放した。さらにロシア領事を逮捕した。このボナパルトの行動は、ロシア皇帝パーヴェ

ル1世には侮辱されたと映った⁶⁾。

1798年7月1日にフランス軍は、アレキサンドリアに上陸した。マムルークの大半は抵抗もせず上エジプトへ逃げた。とどまって戦ったものは、よく訓練ができ規律のとれたフランス軍の歩兵により、ラフマニエ Rahmaniye (7月13日) やさらにギーザ Giza (7月22日) で打ち負かされて敗走した。カイロは抵抗することなく占領された (7月25日)。ボナパルトは短期間のうちにデルタの支配権を強化できた。だが、彼はマムルークがナイル川上流へ移動し南部で新たな勢力を組織できないうちに、彼らを捕らえて全滅させようとする企てにおいて、大した成功をおさめなかった [Karal 1938: 81]。その結果数回アスワンへ遠征隊が送られた。ボナパルトは上エジプトの確固たる支配権を得ることができなかったし、紅海の港 Quesir にもフランスの支配権を樹立できなかった。シリア征服によって側面を強化しようとする彼の企ては、アッカ Acre 要塞を占領できなかったというこれらの失敗で頂点に達した。こうして東方と遮断されたボナパルトは、アブキール湾の戦いで (1798年8月1日) ネルソン Lord Nelson に敗れ本国から孤立した。遠征隊は徐々にしめつけられるように思われたので、ボナパルトと彼の主な副官は、フランスにおけるより大きな名誉を求めて遠征隊を見捨て (1799年8月22日) 部下に最終的な清算をまかせた。

7 パリ駐在アリ大使とタレーラン

1798年4月初めに、アリ大使はトゥーロンでの戦争準備の情報を初めて入手し、同月10日付けの本国政府宛の書簡のなかで、フランスの目的はシチリア島・ジブラルタル海峡にあるとしている [Karal 1938: 149]。だが、しばらくして4月11日に「五百人会」でエジプト遠征が公然の話題となり、17日には「Ami des Louis 誌」でとりあげられ、エジプトはボナパルトを待っていると報じた [Herbette 1902: 223-224]。アリは通訳の Kodrika をフランス外務省へ送り、事態の真相を確認させた。タレーランは「フランスはトルコと戦争状態にはなく、そのような目的を持っていないこと、「五百人会」では自由に意見を開陳でき、このような見解が世論でもなければ政府の公式の見解でもないこと」 [Soysal 1964: 204] を述べて、通訳を翻弄した。5月11日に、タレーランはイスタンブル駐在フランス代理大使ルフィンに訓令を送り、「エジプトが占領されるまでトルコ政府の注意をほかにそらすようにすること、もしこのことで窮境に陥ればマムルークを処罰し、ひいてはスルタンの権力強化をめざすこと、昔から両国の友好関係は常に維持されており、もし両国間に戦争がおきればトルコにとってロシアとオーストリアは危険な存在になることをトルコ政府に伝えること」を求めた。当時、パリからイスタンブルへ書簡が届くには1ヵ月ないしは1ヵ月半を要したことを考慮に入れば、ルフィンに訓令が届くころには、ボナパルトがエジプトに

6) パーヴェル1世とヨハネ騎士団との緊密な関係については、Saul 1970: 43-46を参照。

上陸できる公算は大きい。タレーランはアリおよびルフィンを通じて、トゥーロンでの戦争準備の真の目的についてトルコ政府を偽り欺こうとした。

8 書記官長アトフ＝エフェンディとフランス代理大使ルフィンとの会談

4月10日付けのアリの報告書は5月中旬にイスタンブルに届き、トルコ政府の懸念を増した。大宰相は、その報告書の脇に「トゥーロン港におけるアレキサンドリアにむけての準備は、真実ではなくうわさとしてアリは書いているが、もうフランス人は信頼できないので、今後細心の注意をはらわねばならない」と付け加えた [Karal 1938: 150]。

6月中旬にトルコ政府の手にわたったと思われる4月21日付けのアリの報告書のなかで初めてエジプト遠征に触れられているので、さらにトルコ政府の懸念を増すことになった。フランス代理大使ルフィンは、6月1日付けのタレーラン宛の書簡のなかで「トルコ政府は（フランスの行動に）疑念を抱いている……。モレア半島やクレタ島のトルコの役人は、本国政府にクレタ島・モレア半島・エジプトの占領の可能性について知らせている」と伝えた [Testa 1864: I, 537]。

ついに書記官長は、6月19日にルフィンを呼びつけ、説明を要請した。彼はまだ5月11日付けのタレーランの訓令を受け取っていなかったが、新聞などからエジプト遠征の可能性は十分ありうると考えていた。3時間におよぶ会談のなかで彼は、本国政府からなんの訓令も受け取っておらず、書記官長の不満に対してタレーランのごとく巧妙に回答するように努めた。つまり彼は「トゥーロン港における準備は何のためなのか情報を持っておりません。私も新聞からその件について知りましたが、真実は分かりません」 [Cevdet 1309: VI, 319]。「私見を申し上げることはできます。フランスとエジプトとの通商の重要性はよく知られています。エジプトにおけるフランス人の通商は、マムルークの不正によってその安全を脅かされています。……したがってフランスは派兵して彼らを排除しようと考えたのです。貴国も以前ガーズィ＝ハサン＝パシャを討伐のためエジプトへ送ったではありませんか。使節ヴェルニャックのときにもこの苦情を伝えましたが、なんら成果はありませんでした」 [Cevdet 1309: VI, 320]。

「このようなわけでマムルークの横暴を排除し、イギリスのインドにいたる通商路を断ち切る目的で、軍隊を送ることは思いつきますが、エジプトへどのようにして行くのか、また目的地はエジプトなのか。オスマン政府と協議して行動すべきなのか私には分かりません」 [Cevdet 1309: VI, 320-321]。

このルフィンの発言に怒った書記官長は「エジプトで不正があれば、われわれに相談すべきことだ。オスマン政府は必要な措置を講じている。どの国にも不正はありうる。もし貴国で混乱が見られ、総裁政府に力が無いと言って、トルコがマルセイユに派兵すれば、フランスはこの行為を妥当とみなすか」 [Cevdet 1309: VI, 321]、さらに「エジプトはわれわれにとって神聖な所である。エジプトへの攻撃はイスラムの信仰への攻撃を意味する。これらを

排除することはムスリム地域の義務である」[Cevdet 1309: VI, 322] と述べた。

5月11日付けのタレーランの訓令は、6月29日にフランス使節のもとに届いた。大宰相は高官を招集して、4月21日付けのアリの報告書を読み上げ、ルフィンと書記官長との会談の様態を伝えてフランスの予想される行動を考慮に入れて、エジプト防衛の手段を話し合った。

その結果トルコ政府は急使をパリへ送り、アリに訓令を指示した。すなわち「トゥーロン港に集められた兵力はエジプト、あるいはモレア半島、クレタ島、キプロス島などのオスマン領に上陸する可能性がある。必要な措置は講じられている。フランスがわが国を攻撃することがあれば、不正なことである。われわれはヨーロッパの戦争に中立を守ってきた」[Karal 1938: 154-155]。パリには7月20日あるいは21日に届いたと思われる。この訓令が届かないうちに、つまり7月3日付けの書簡でアリは、「マルタ島がボナパルトによって占領されたこと、彼の真の目的はここにあった」と知らせてきた。アリはこの時点においてもフランスの真の狙いを理解していなかったようである。

9 アリ大使とタレーランの会談（1798年7月21日）

アリ大使は本国政府からの訓令を受け取るや否や、7月21日にタレーランと会談をもった。パリにはまだその情報は届いていなかったが、ボナパルトはこのころエジプトに到着していた。彼は「ナポレオンの目的は何であるのか。またエジプト遠征がでっち上げならば、新聞でこれを否定すること」を要求した。タレーランは「ボナパルトの戦争目的はマルタ島占領で実現し、このことをトルコ政府は喜ばねばならない」と言った。さらに「たとえばクリミアをロシアから解放するためにフランス軍をイスタンブルへ送るうわさがあるが、これは注目に値することである」と表明した。

事実タレーランは4日後、つまり1798年7月25日に「五百人会」や新聞紙上でエジプト遠征に関するうわさを否定して、ア리를喜ばせた [Karal 1938: 84]。

タレーランはトルコ大使ア리를うまく説得した。フランスへの宣戦布告（1798年9月12日）やアリのタレーラン宛の国交断絶を伝える書簡（1798年10月5日付け）の中でこのうそは明らかにされた。

タレーランは、ルフィン宛の7月26日付けの覚書で、「約2時間続いたアリ大使との会談について、貴下に詳細を説明しない。以下のことを知れば十分である。戦争の本当の目的はマルタ島であること、その後決して征服は企てないこと」、「フランスは現在、戦争状態にあることによって、地中海が海賊で満ちている時期に軍事行動をとることは、きわめて当然のことである。会談は相互に友好的に終わり、アリは満足して去った。」「当地でもれ伝わる情報を収集し、それを私に伝えよ。書記官長との会談のさいに問題の件にふれることがあるかもしれないが、その際には私がアリ大使と会談した内容の枠内で行動せよ」と伝えた。さらに追伸として「征服という言葉は神経質に厳格に考えることはない。占領と征服は異なる。

マムルークの圧制に対する処罰は征服とはならない。5月11日付けの訓令にしたがって行動せよ」[Herbette 1902: 232-233] を付け加えた。

ついにエジプト遠征のことを、5月11日付けの訓令を6月29日に受け取ったフランス代理大使ルフィン、7月1日付けの回答の中で、「ボナパルトの本当の目的についてオスマン政府に可能な限り沈黙し続けること、5月11日付けの訓令を自己の見解のように伝えること、総裁政府はマムルークをスルタンに従属させる誠実な目的をもっていることを主張すること」[Testa 1864: I, 539-540] を知らせた。

10 フランス軍のエジプト侵略、帝都に伝わる

フランス軍のアレキサンドリア上陸の第一報は、キプロスの長官からフランス領事を通じて入手したものであり、7月10日に帝都へ送られ、同月17日にトルコ政府の手にわたったようである [Karar 1938: 84]。他方これを目撃したギリシア人がフランス軍から逃れてダーダネルス海峡にいた海軍提督に伝え、ヒジュラ暦サフェル月3日（西暦1798年7月17日）にイスタンブルへこの情報は送られた [Cevdet 1309: VI, 329]。この情報は帝都に7月23日ころに届いたようである⁷⁾。フランスとトルコは古くからの友であり、革命後もとりわけ1795年には革命政府を承認し友好的な関係にあった。しかしいまフランス軍はエジプト占領を企てた。7月末から8月初めに作成されたと考えられている勅令の中で、セリム3世は、「フランスを友人とみなしてきたが、6年間異教徒（フランス人のこと）は、われわれを欺いてきた」[Karal 1946: 54] と怒りをあらわにした。

しかしセリム3世は、すぐにフランスに宣戦布告することは適当ではないと考えた。なによりもまず戦争準備ができていなかった。またフランスの敵国と意志の疎通をはかり、トルコへの攻撃の懸念を払拭することが必要であった。同じ勅令の中で彼は「戦争準備は急いで行う必要があるけれども、宣戦布告までにはしばらく時間をかけねばならないと考えている。諸国家と連絡しあって、エジプトの現状が把握された段階で宣戦布告をすればよい。これらは私見であり、宣戦布告といった重要な問題は、御前会議で全会一致を必要とする。宣戦布告を延期するか、または即時宣戦布告するかいずれを選択するにせよ、そのメリットおよびデメリットを協議しなければならないこと」[Karal 1946: 54] を知らせた。

代理大使ルフィンは、本国政府からの許可が届かない段階で、つまり1798年8月2日に5月11日付けの訓令をトルコ政府に公式に知らせた。

11 フランスへの最初の対抗策

1798年6月19日に書記官長と代理大使ルフィンの会談後、大宰相は会議を招集して以下

7) カラルは7月25日としている [Karal 1946: 55]。

の見解で同意を得た。すなわち「エジプトは（イスタンブルから）遠方の地にある。（フランス軍が）エジプトに上陸してから軍事援助に赴くことは不可能である。今からカイロ、アレキサンドリア、Dimyat, Resit 付近の防備を固めねばならない。だが、この対策にマムルークから疑念を惹き起こす可能性はある。この対策がマムルークに対してなされたものとするからである。だからまず彼らに、講じるべき対策はフランスに対するものであることが説明されねばならない。明晰な人物を選び、カイロに派遣して、総督をはじめ当局者と会談しなければならない。このたびの軍事的な準備は、マムルークにではなくてフランスに対するものであること、これらを確認する目的で、エジプト遠征について書かれた記事が掲載されている新聞をカイロで公表することはできる」[Cevdet 1309: VI, 290-291]。

1798年7月1日にフランス軍は、アレキサンドリアに上陸した。エジプト総督もマムルークも何も情報を持ち合わせておらず、防衛の準備はいうまでもなくイスタンブル政府からは何の連絡もなかった。

セリム3世は、7月末ころ大宰相に宛てた勅令の中で、「エジプトの一握りの砂（土）も放棄しないこと、異教徒（フランス人）の策略を信頼するな。艦隊であらゆる援助を行うこと」[Karal 1946: 49]を知らせた。

セリム3世は、さらにエジプト総督ベキル＝パシャ Bekir Paşa に宛てた勅令の中で、「シャイフ＝アル＝バラド（「都市の長官」）のイブラヒム＝ベイ Şülbeled İbrahim Bey やアミール＝アル＝ハッジ（「巡礼隊の指導者」）のムラト＝ベイ Murad Bey と協力してフランスの攻撃に抵抗することを命じ、オスマン政府はあらゆる援助を行うこと」を伝え、エーゲ海および地中海の沿岸諸都市に送った多くの命令の中で、「攻撃を受ければ抵抗し、援軍は派遣されること、敵軍の今後の軍事行動に関して情報を入手すればイスタンブル政府に伝えるように」[Karal 1946: 49-50]と警告した。

北アフリカの諸公国の海軍もトルコ海軍に合流する通達が出された。

さらにダーダネルス海峡を通過する船舶を臨検することがきまり、その旨がイスタンブルの在外公館に連絡された [Cevdet 1309: VI, 352-353]。

セリム3世は8月初めころ、アナトリアおよびシリアの港湾に、「(われわれは)エジプトを攻撃しているフランス軍と戦闘状態にあること、オスマン国家の友好国であるイギリスの地中海船舶に必要とされる糧食・水および補給物資がただちに用意されること、イギリス艦隊はオスマン国家の艦隊としてみなされ厚遇されること」[Karal 1946: 52-53]という命令を送った。

ボナパルトはエジプト上陸後、ムスリムの友人であることを示すための宣伝活動を実施するであろうと思われることから生じる影響力を排除するために、オスマン政府はムスリムに以下の警告を発した。

「フランス人は異教徒で、反徒である。神の唯一性および預言者ムハンマドのことを信じていない。他の信仰も来世をも否定している。彼らは偽りの信仰を信じているために、教会の財

産を没収し、聖職者を略奪した。人類はすべて平等である。」

「フランス人は、彼らが構築した世界宗教を受け入れないものには、飢えた犬のように襲いかかり、彼らの信仰や支配制度を破壊した。」

「フランス人はうまいことを言って、あなたがたを欺こうとしている。かれらの本当の目的はメッカ・メディナ・カーバ神殿やあらゆるモスクを破壊し、女・子供以外の男性を殺害することである。自身のやり方、自身の信仰を受け入れさせ、イスラムを完全に排除した後、定着したところを支配しようとしている。」

「唯一神や預言者ムハンマドを信仰するムスリムは、このような道を誤らせるような異教徒と戦うことは、われわれに課せられた義務である」 [Karal 1947: 39-40]。

12 フランスと国交断絶

フランス軍のエジプト占領にもかかわらず、フランス人が市中を闊歩していることはトルコ人の怒りの火を燃え立たせ、公式な関係を断たねばならない状況になった。そこで8月6日にフランス代理大使を呼びつけて、国民感情の憤りのために事態が收拾されるまで、明確な対策を、つまりフランス大使館と公式な関係を断つことを知らせた。フランス代理大使は、新任の大使が赴任するまでこの決定の延期を要請したが、拒否された [Cevdet 1309: VI, 352]。3日後の8月9日にオスマン政府は、イスタンブル在住のフランス人に外出禁止の通達を出した。もちろん代理大使ルフィンに抗議し、オランダとスペインの代理大使がフランスのために善処を要請したが、効果はなかった。いまや代理大使ルフィンは、オランダ使節を通じてトルコ政府と接触することしかできなかった。8月9日にオランダ使節は、書記官長アトフ＝エフェンディ Atuf Efendi および大宰相イスメト＝ベイ İsmet Bey と会談をもち、新任のフランス大使が着任するまで公式な関係を断絶しないように要請した。だが、トルコ側はこれは不可能であること、ムスリムの憤りのためにフランス人が市中を自由に闊歩することは危険なことであり、自宅に留まることで保護されると回答した [Cevdet 1309: VI, 35; Kabrda 1947: 26]。

2日後の8月11日に書記官長は、プロイセン使節に戦争準備を隠すために、フランスへの宣戦布告は延期されることを告白した [Cevdet 1309: VI, 352]。

8月中旬にパリ駐在アリ使節から7月21日にタレーランと行なった会談の報告がイスタンブルに届いたとき、アリはフランス外相タレーランからいかに愚弄されているか後悔の念をもって観察された。

7月26日にタレーランが代理大使ルフィンに宛てた書簡の中で、「トルコ政府はまだなにも知らないと思う。さらに脚注で、以前に送った書簡の中で明らかにしたように（フランス）艦隊がエジプトへ到着したことや、その結果について情報がない段階でエジプトの占領とか征服に関して議論するな」 [Soysal 1964: 242] と述べた。

タレーランはボナパルトから6月10日にマルタ島を占領した際に、ムスリムの捕虜を解

放した情報を入手するや否や、大いに喜んで8月20日にアリにこのことを知らせた。アリは9月4日付けの書簡でこの件を本国政府に伝えた。アリがエジプト遠征についてだまされていることに、まだ気づいていないことは、帝都で大いに憤りを惹き起こした。

アリの報告書に、大宰相は「フランス人はまだアリを欺こうとしていることは本報告から明白である」と書き添えた。さらにセリム3世は、「この愚か者めが」と書き加えた。

タレーランは、8月3日付けの代理大使ルフィンに宛てた書簡の中で、「イエディクレ Yedikule（七つの塔の意味）に監禁されることを恐れるな。オスマン政府はそのような行動をとることができないと考える。われわれには人質（アリ大使）がいるからだ」[Herbette 1902: 237] と知らせた。

13 フランスへの宣戦布告

アブキール湾でネルソン提督率いるイギリス艦隊が、フランス海軍を破ったという情報は1798年8月20日にロードス島の総督からイスタンブル政府に伝えられた [Kara1 1938: 93; Kabrda 1947: 41]。

同年8月23日にオスマン政府は、イスタンブル駐在英国代理大使を介して、ネルソン提督に祝賀と謝意を表明し、ネルソンへ2,000枚の金貨を送った [Cevdet 1309: VI, 355]。

イギリスのアブキール湾における勝利は、トルコのフランスへの宣戦布告を早めさせることとなった。8月31日にイスタンブルでは高官の間で重要な変化がおき、戦時体制に突入することが求められた [Kara1 1938: 94]。

セリム3世は、当時エジプト総督であったとき、フランスの攻撃が予想されたにもかかわらず準備を怠ったかどで、大宰相イゼット＝メフメト＝パシャ İzzet Mehmet Paşa とその部下とみなされていたシェイヒュルイスラムのドウリ＝ザーデ＝アリフ＝エフェンディ Dürri Zade Arif Efendi を1798年8月31日に解任した。このような微妙な時期に有能で精力的である人物をトップにそえることが必要と考えられた。そこでシェイヒュルイスラムにはアシル＝エフェンディ Aşir Efendi を、大宰相にはエルズルムの知事ユスフ＝ズイヤ＝パシャ Yusuf Ziya Paşa をそれぞれ抜擢した。

「イスラム世界の大都市、オスマン国家、エジプトとその周辺地域から、スルタンたち、パーディシャー（大王）陛下にとってフランスの異教徒を排除するために陸上・海上から（軍を）派遣することは、シャリーア上（イスラム法上）妥当か」との質問に対して、ヒジュラ暦1213年レビュルエヴェル月21日（西暦1798年9月2日）にフランスに対する宣戦布告を正当化するフェトヴァが出された [Kara1 1938: 95-96]。

同日代理大使ルフィンは、オスマン政府に呼び出され、フランスがエジプトを侵略したことで平和が崩壊したこと、したがって宣戦布告をフランスに対してせざるを得なくなったことが伝えられた。彼は大使館関係者とともにイエディクレに監禁された [Cevdet 1309: VI, 355]。

宣戦布告が出されたころ、大宰相イスマト＝ベイ＝エフェンディと書記官長アトフ＝エフェンディは会談し、「トルコは、イギリス・ロシアの三国とフランスに対抗する共同行動をとること」をスルタンに進言した。ロシアの黒海艦隊が地中海へ南下するために、ボスフォラス海峡に到来したことを、ロシア使節タマラから伝えられた。ヒジュラ暦 1213 年レビュルエヴェル月 24 日（西暦 1798 年 9 月 5 日）に、ロシアの黒海艦隊はボスフォラス海峡に入り、ビュックデレに投錨した。この艦隊はトルコ艦隊と共同行動をとるために地中海に向かうことについて再三再四、書記官長とロシア使節および提督それに英国代理大使との間で会談がもたれた。9 月 19 日にロシア艦隊は出帆し、ダダーネルス海峡に投錨しているオスマン艦隊と合流し、トルコ艦隊の提督カドリ＝ベイの総指揮のもと露土連合艦隊は、一路イオニア海のコルフ島に向かった [Cevdet 1309: VII, 4-5]。

他方、オスマン政府は、9 月 12 日にフランスへの宣戦布告書を、イスタンブルの在外公館に回状で知らせた。オスマン国家の正当な戦いを諸国に知らせる一種のプロパガンダの目的を狙っていた⁸⁾。

「これより 6 年前おきたフランス革命の初期から、大半の国家は対仏同盟を結んだ。しかしオスマン国家は、フランスとの昔からの友好関係を考慮に入れて中立の道を選んだ。もっとも対仏同盟諸国からオスマン国家へ同盟参加の要請が繰り返しおこなわれたが」 [Cevdet 1309: VI, 408]。

「戦争期間中、オスマン国家が中立であったことは、フランスにとって有益であった」 [Cevdet 1309: VI, 408]。

「イタリアにいるフランス軍は、人を迷わせる目的で、バルカン半島やモレア半島それに地中海の島々に策略をもって手先をおくり、陰謀をめぐらすパンフレットを発行することに着手した。さらにボナパルトが、(モレア半島の)マンヤのひとたちに送った文書や他の公表したパンフレットは、陰謀を含んだものであることはよく知られている」 [Cevdet 1309: VI, 409]。

「オスマン政府がフランス軍の司令官や将軍のこの種の行動に対して、総裁政府に苦情を述べるたびに、『わが将軍の行動が友好関係には有益であることに変わりはない。われわれの目的は、昔からオスマン国家との明らかな友好関係をますます強化することである』と公式に回答した」 [Cevdet 1309: VI, 409]。

「フランス人によるエジプト攻撃の情報を最初に入手した際に、イスタンブル駐在代理大使ルフィンを会談に招き、事態を彼自身に尋ねた。『決してそのような情報はない。私見としてフランスが今回の遠征を実現するとすれば、マムルークに復讐し、イギリスのインド通

8) フランスへの宣戦布告書のトルコ語文については、Cevdet 1309: VI, 408-412 を、フランス語訳については Testa 1864: I, 548-553 を参照。

商に損害を与えることであろう』と回答した。このような事態においてもオスマン政府を惑わし続けることで、両国は明白な友好的関係から敵対関係へと変化した。オスマン政府はエジプトの一握りの土地をも割譲することはありえない。このエジプトの地を侵略する敵に対して、イスラム国家が行動をおこすことは必要である。いかなる理由であれフランスがエジプトを攻撃すれば、オスマン政府はこれを宣戦布告とみなす。もしマムルークを処罰するならば主君であるスルタン政府によって行われるべきであり、フランスのこの内政干渉は国際法に違反する hukuk-i milel mugayir 事態である。イギリスはトルコの友人であるので、フランス軍がわが領土を通過してイギリスの通商に損害を与えることに決して同意しない」[Cevdet 1309: VI, 410]。

1798年11月8日に本国政府からアリに、「トルコはフランスに宣戦布告したことをフランス政府に伝えて、帰朝すべし」との訓令が送られた。

14 対仏露土同盟条約（ヒジュラ暦1213年レジェプ月26日、西暦1799年1月3日）

ボナパルトの遠征のもっとも直接的な結果は、トルコをフランスの敵国つまりイギリス・ロシアへと追いやったことであつた。フランス軍上陸の知らせは、イスタンブルで戦争を求める圧倒的な民衆の感情を惹き起こした。戦争を認めるフェトヴァは1798年8月3日にだされたが、大宰相とシェイヒュルイスラムに率いられた御前会議の親仏派は、フランスと外交的に調整して解決することを望んだので、実際にはいかなる宣戦布告もなされなかった。他方、反仏派は、宣戦布告はオスマンの陸軍・海軍の準備ができ、英露両国と同盟が締結されない限り役に立たないということに同意した [Karal 1937: 123-124; Karal 1938: 98-99]。トルコのフランスへの接近は、成功しなかった。アブキール湾におけるネルソンの勝利の知らせが8月14日にイスタンブルに届いたとき、セリム3世は正式に対仏戦争に突入できるほどに信頼できると確信した [Karal 1938: 93; Kabarda 64-70; Asım: I, 70-71]。だが、御前会議のフランス支持派は、オーストリア・スペイン・スウェーデン・オランダの大使の支援を得て当分の間、なんとか宣戦布告を延期しようとした。ついに宣戦布告をしたのは（1798年9月2日）、セヴァストポールからイスタンブルへ艦隊を派遣することで、ロシアが宣戦布告の発布をせまったあとのことにすぎなかった [Karal 1938: 95-96; Kabarda 13-14]。親仏派の大臣は逮捕され、代わりにウレマーの味方、ユスフ＝ズィヤ＝パシャ Ziya Paşa が大宰相に起用され、彼の親友アシル＝エフェンディ Aşir Efendi がシェイヒュルイスラムとなった。イスタンブルではフランス大使とその部下がイエディクレに監禁された。またフランスの商人・顧問官を逮捕し監禁し、オスマン帝国内の彼らの財産を没収する命令が出された。こうしてボナパルトの無分別な冒険は、フランスにとって数世紀にわたって築き上げられてきた中東における地位と優位を犠牲にした。

さいは投げられた。だが、対仏同盟条約が正式に結ばれるまでにはまだ時間がかかった。外交官が交渉している間、地中海地域におけるフランス軍に対して、オスマン軍と共同の海

軍遠征隊に参加するために、ロシア軍艦が初めてボスフォラス海峡を通過する許可が与えられた。ウチャコフ Uchakov の艦隊はイスタンブルの北方 15 マイルのビュックデレに投錨した。彼は 9 月 5 日に軍事的な交渉のためにオスマン政府のところに到来した。議論の要点は、オスマンとロシアの艦隊がいかにして協力すべきか、またかれらの目的がどこなのか、つまりアドリア海・マルタ島あるいはシリアおよびエジプトの沿岸であるのかという緊急な問題であった。この時点におけるロシアの基本的な目的は、フランスのバルカン半島への侵入を阻止することであった。そこでロシアはイオニア諸島からフランス人を追い出し、地中海中央部でフランスの進出をくいとめる行動を優先し、最近アブキール湾で勝利をおさめたイギリス艦隊は、当地でフランス軍を封鎖するだけで十分であろうと彼は述べた。他方、イスタンブル駐在のイギリス大使スペンサー＝スミス Spencer Smith は、この可能性よりもレヴァントにおけるフランスの目的に関心を払っていた。そこで彼らは地中海という広大な海で敵を阻止しようとする不確実な結果のために、沿岸を封鎖することで同盟国としての協調を選んだ。アドリア海での差し迫った危険に、オスマンの代表者たちはロシアの態度に傾き、シリアを防衛しエジプトを奪回するために地上戦を利用しようとした。エジプトおよびシリア沿岸での海戦はもっぱらイギリス艦隊に任せられ、イスタンブルから送られたオスマン艦隊が増援することになった。ウチャコフ率いる露土連合艦隊の本隊はアドリア海の支配権を手に入れ、イオニア諸島からフランス人を追い出すために軍事行動をすることになった。その後連合艦隊は南方でイギリス支援に向かう予定であった [Asim: I, 70-75; Hurewitz 1964: 482-483]。

9 月 17 日にロシア艦隊、翌日提督カドリ＝ベイ Kadri Bey 率いる約 25 隻からなるオスマン艦隊がイスタンブルをそれぞれ出帆した。2 日後、両艦隊はダーダネルス海峡付近で合流した。10 月 1 日に両艦隊は戦闘を開始するためにロードス島に向かった。同日同じ規模の艦隊が、イギリス艦隊と合流するためにアレキサンドリアに向かった [Asim: I, 71; Anderson 1952: 367]。

タレーランはいまやトルコが英露と協調しないようにという希望が無くなったことを知った。そこでパスヴァンオール Pasvanoglu がオスマン朝を倒して、彼を擁立することを支援しようと考えた。タレーランは、モレア半島やマケドニアに侵入することでこの転覆を果たす用意をした。彼は、ギリシア人とテペデンリ＝アリがこの企てを支援してくれることを確信し、彼等の支援を確かなものとするためにただちに手先を派遣した。だが、その前にスルタンがまず動いた。スルタンはヴェジールの地位にテペデンリ＝アリを昇進させ、彼の征服地すべてに対して正式な承認を与え、フランス人からアルバニア沿岸の港を獲得し、さらなる異教徒からの侵略からこの沿岸を防衛することを同意させた [Boppe 1914: 14-15; Iorga 1962: V, 128-129; Zinkeisen 1859: VII, 6-8]。セリム 3 世の命をうけてギリシア正教の総大主教は、フランスの甘言にのらないようにモレア半島の信者に警告し、1770～1772 年にロシアの扇動でなされた同じような企ての運命を彼らに明確に思い起こさせた。

同時にパスヴァンオールに対する戦いは終わり、ヴィディン Vidin の包囲は解かれた。彼はいまやヴィディンの名望家ならびに総督と正式に任命され、随意に自己の領土を拡大できる機会が与えられた。そこで彼もまたフランスに関するかぎり、中立的な立場におかれた [Zinkeisen 1859: VII, 239-240]。

9月にテペデンレリ＝アリはヴィディンから戻るや否や、彼のもとへ送られたフランスの手先を監禁し、Vonitza, Butrinto（9月28日）を、ついでプレヴェザ（10月13日）を占領した。当地のギリシア人の大半は恐れてコルフ島、サンタ＝マウラ島へ逃げた。テペデンレリ＝アリはついに Suliotes やパルガの住民をうまく出し抜き封鎖することができた。そこで初めて完全にアルバニア沿岸に支配権を樹立することができた。同時に彼は自己の領土にイオニア諸島を追加したい長年の野心を満たすために動いた。彼はこの目的のために遠征隊をただちに準備し始め、このことを実施するためにスルタンの許可を求めた [Zinkeisen 1859: VII, 184-188]。

テペデンレリ＝アリにとり大変残念なことには、露土連合艦隊がちょうどよいときに到着し、彼の機先を制した。10月1日にダーダネルス海峡を去った後、まず Hydra に到着し、フランス人にたいして抵抗することを要請し、平和が樹立されたあと住民が望む政治形態の確立を約束する宣言が島民に送られた [Karal 1937: 100-112]。1797年以來フランスによる島の支配は、住民にとりことのほか有益であった。ヴェネツィア人のもとで横柄な支配を行ってきた土着の貴族政治は、封建制度の廃止、強制労働からの農民の解放、裁判の再組織化、教育の普及といった改革によって危うくなった。だが、フランスの守備隊を維持するためにますます重税を課すことと、改革を導入する横暴な強制的なやりかたは、反フランスのプロパガンダを広める貴族階級だけではなく、庶民の大半をも遠ざけた。連合艦隊が攻撃に転じたとき土着の島民は上陸を支援した。フランスの守備隊は、チェリゴ Cerigo（10月13日）、サンテ島（10月24日）、ケファロニア島（10月28日）、サンタ＝マウラ島（11月13日）、Ithaca（11月15日）でわずかばかりの抵抗をして降伏せざるをえなかった。コルフ島のフランス人は最初の攻撃に都合よく抵抗したが、そのあとで包囲攻撃をうけた。テペデンレリ＝アリは連合艦隊に先じて島々を占領できなかったことに失望した。さらに冬から春にかけて行われるコルフ島の包囲攻撃に参加すべしとの要請を受けた。

ヒジュラ暦 1213 年レビュルアヒル月 20 日（西暦 1798 年 10 月 1 日）とヒジュラ暦 1213 年レビュルアヒル月 23 日（西暦 1798 年 10 月 4 日）にロシア使節とトルコの書記官長との会談がもたれた⁹⁾。対仏露土防衛同盟条約が 1799 年 1 月 3 日に調印されていることを考慮に入れるならば、この会談は条約調印の約 2 ヶ月前におこなわれたことになる。すでに述べたようにロシアとトルコはこの会談の前月には共同軍事行動をおこしていたのである。この

9) 会談の詳細については、尾高晋己 2004 を参照。

会談は条約調印にむけて大詰めの会談であり、1799年の対仏露土防御同盟条約の骨子が議論されたと推察される。すなわち、「露土両国間においていかなる援助がなされるべきか。つまり兵士あるいは艦隊を送るか、陽動作戦を展開するか、現金で支援するかが問題となった（第5条）。陸軍の兵士や艦隊の船員の糧食はいかにして調達されるべきか。つまり「現物で」か「現金で」調達すべきなのか。オスマン国家にはない塩漬けの肉・蠟燭・医薬品は「現金で」支給されるべきか。穀物はどこで調達すべきか。ロシア艦隊には、イスタンブルに入港した日から起算して穀物は支給されるべきである。艦隊の修理が必要になった際に、必要物資が「流通価格」で支給されるべきである（第9条および第10条）。戦利品は入手した兵士の手元に残る（第11条）。この同盟に参加を望む国々についてイギリス・プロイセン・オーストリアといった諸強国（kaviyyül-iktidar olan düvvel）を明示し、その他は他の国々（düvel-i saire）を示唆することが話された（第12条）。この同盟条約の有効期間についてロシアは8年を要望した（第13条）。批准書の交換の期間については、ロシア側の要求により2ヵ月と定められた（第14条）。」

しかし正式な対仏同盟のための交渉は、イスタンブルでだらだらと続いた。セリム3世はロシアの支配下に完全に陥ることを懸念して、バルカン半島にロシア軍を駐留させる許可を求める要求に抵抗していた。他方、イギリスは中東になんら領土的野心をもっているようにはみえなかったため、セリム3世はイギリスに対するいっそうの信頼感を抱いた。この時点におけるセリム3世の主な努力は、イギリスの同盟国（ロシア）の非常に厳格な支配からセリム3世を守るために、イギリスを含む協定（条約）を締結する方向へ向けられた [Hurewitz 1964: 479]。セリム3世はこの政策を遂行するにあたり、かつて一時は彼の新軍において専門家として活躍したケーラー将軍 General Koehler の指揮下で、オスマン軍を訓練・指導するために送られたイギリスの小銃隊・砲兵隊・工兵隊将校の任務を受け入れた [Asım: I, 67; Zinkeisen 1859: VII, 45]。ロシアは自己の要求に固執し、セリム3世はそれがまったく受諾不可能であるとした。フランスは、講和が確かなものとならないようにし、イスタンブル駐在の中立国の友人によって交渉を失敗させようとした。だが無二の結果は、英露両国大使の不満のはげぐちはフランス人の追放であった [Zinkeisen 1859: VII, 755-756; Kabrda 1947: 82-85]。大使アリはパリにとどまり、他方タレーランは解決（和解）を得るために彼と交渉を開始しようとした。だが、大使アリは和解をする権限は自分にはないと述べ、立ち去る許可を求めた。さらに一時はなにも起こらなかったが、フランス政府はその要求を拒み、将来有益な接触ができることを期待して戦争の残りの期間彼を快適に（満足して）すごさせた [Herbette 1902: 245-257]。ロシア軍の配備や使用に対して全面的な支配権をスルタンがもつという条件で、イギリスがセリム3世を説得してロシア軍の提供を受諾させたとき、12月末のイスタンブルでの交渉はついに良い結末を迎えた [Asım: I, 62]。1799年1月3日と5日に露土同盟が、英土同盟がそれぞれ調印された。8年の有効期間をもつ露土同盟は、ヤッシー条約を確認し、あらゆる敵に対して相互の援助を、またい

かなる講和にも相互の同意を規定した。各国は相手国の領土内で軍事行動を展開する兵士や海軍のために、必要物資を提供することになった。各国の戦艦は相手国の水域を自由に航行し完全な援助を与えられることになった。秘密条約のなかでトルコは、ロシア戦艦が戦時中にかぎり両海峡とオスマン帝国の港を使用することが許されることを明記した。両国は、条約に参加することを要請されることになったイギリスと共同の海上の軍事行動をとることについて協議することに同意した。あらゆる他の国の戦艦はボスフォラス海峡や黒海に入ることとはできなかった。ロシアは一度にトルコがまえもって定めたバルカン半島におけるトルコ軍を支援するために80,000名の軍を派遣することになるだろう。

む す び

カンボ＝フォルミオの和約（1797年）以後、フランスの東地中海への進出に脅威を感じたロシア皇帝パーヴェル1世は、先代のエカテリーナ2世の対トルコ政策を見直し、敵対的態度から友好的なものへと大転換をし、トルコにフランスの脅威に対抗する措置をとるよう働きかけた。他方、トルコはこの時点ではフランスの側圧を感じていなかった。

だが翌年トゥーロン港における大規模な遠征準備、さらにマルタ島の占領のニュースがイスタンブルに届き、トルコ側はフランス軍の行動に一抹の不安を覚えた。この時期イスタンブルでは対仏同盟条約締結に向けて、ヨーロッパの使節の外交活動が展開され、トルコの書記官長もロシア使節と何回となく会談をもった。だがまだトルコの外交政策に変化は見られなかった。1798年7月にボナパルトの軍が、エジプトに上陸し、各地を占領したという情報が帝都に届くにいたって、トルコ側はフランスの脅威を初めて実感したようである。さらにフランス軍が、アブキール湾の戦いで英軍に敗北したことが一大転機となって、ついに伝統的な政策をすて、必ずしもトルコ内部において全会一致は見られなかったが、フランスに宣戦布告するにいたった。その後ロシアおよびイギリスとトルコは事実上の共同軍事行動を展開した。他方、帝都ではロシア・イギリスとの交渉が進み、ついに1799年1月3日に対仏露土同盟条約が調印されたのである。以上、トルコ側の視点に立ち、18世紀の「第二の外交革命」と呼ばれるトルコ外交の変容における過程の一端を明らかにした。

参 考 文 献

- Cevdet Paşa, Ahmed (1309) *Tarih-i Cevdet, Tertib-i Cedid*. Vol. VI. İstanbul.
- Anderson, R. C. (1952) *Naval Wars in the Levant from the Battle of Lepanto to the Introduction of steam, 1559-1853*. Princeton.
- Asım, M. (n. d.) *Asım Tarihi*. İstanbul.
- Boppe, A. (1914) *L'Albanie et Napoleon. 1797-1814*, Paris.

- McKay, Derek & H. M. Scott (1991) *The Rise of the Great Powers 1648-1815*. London & New York.
- Herbette, M. (1902) *Une ambassade turque sous la direction*. Paris.
- Hurewitz, J. C. (1964) The Background of Russia's Claims to the Turkish Straits: A Reassessment. *Bulleten* 28, 459 - 503.
- Iorga, N. (1962) *Geschichte des osmanischen Reiches*. Vol. V. Gotha.
- Kabrda, J. (1947) *Quelques Firmans concernant les relations franco-turques lors de l'expédition de Bonaparte en Egypte*. Paris.
- Karal, E. Z. (1937) Yunan Adalarının Fransızlar tarafından işgali Osmanlı-Rus münasebeti 1797 - 1798. *Tarih Semineri Dergisi* 1, 100 - 125.
- Karal, E. Z. (1938) *Fransa-Mısır ve Osmanlı İmparatorluğu (1797-1802)*. İstanbul.
- Karal, E. Z. (1946) *Selim III ün Hattı Hümaynları*. Ankara.
- Karal, E. Z. (1947) *Osmanlı Tarihi*, V. Ankara.
- Kurat, A. N. (1970) *Türkiye ve Rusya*. Ankara.
- Lewis, B. (1953) The Impact of the French Revolution on Turkey: Some Notes on the Transmission of Ideas. *Journal of World History* 1, 105 - 125.
- Öz, T. (1942) Selim III ün Sıratıbi tarafından tutulan Ruzname. *Tarih Vesikaları* 3, 183 - 199.
- Saul, N. E. (1970) *Russia and the Mediterranean 1797-1807*. Chicago & London.
- Soysal, İ. (1964) *Fransız İhtilali ve Türk-Fransız Diploması Münasebetleri (1789-1802)*. Ankara.
- Testa (1864) *Recueil des Traités de la Porte Ottomane avec les Puissances Etrangères*. Vol. 1. Paris.
- Zinkeisen, J. W. (1859) *Geschichte des Osmanischen Reiches in Europa*. Vol. VI. Gotha.
- 『近代国際関係条約資料』(1991) 第2編1巻 龍溪書舎.
- 田中治男・木村雅昭・鈴木董編 (1992) 『フランス革命と周辺国家』リポート.
- 尾高晋己 (2003) イスタンブル駐在ロシア使節とトルコの書記官長との第一回会談について『愛知学院大学文学部紀要』32, 115 - 120.
- 尾高晋己 (2004) イスタンブル駐在ロシア使節とトルコの書記官長との会談 (1798年) について『愛知学院大学文学部紀要』34, 155 - 167.

(愛知学院大学文学部)